
みくづになりゆけば

つき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みくづになりゆけば

【Nコード】

N7426R

【作者名】

つき

【あらすじ】

雨を感じながら亡くした母を想う少女のお話。

不規則なりズムの中に、微かに残る旋律。掻き混ぜたかのように乱れながらも、僅かに香る唄声に近い反響。ぴちゃん、ぴちゃん、とそれはとても、心地よく私の心を揺らし、引き寄せるのだ。誘うように、導くように。どこに、かはよくわからない。言葉にはできない曖昧な場所へ。濡れた頬を拭うこともせず、何となくそう感じた。

私は雨が好きだ。雨の日には傘も差さず、降られるがままに山道を散策するのが決まりだった。髪の毛を重く濡らし、重力に伴って額を、頬を、喉を、腕を、足を伝い落ちて、そのまま私の影から滑り落ちていく水滴が、とても気持ちよく心地よかった。それは生まれながらの魂に刻まれた、本能に近い感覚だった。肌に張り付く服が、他の人とは別の意味で煩わしかった。

もしかしたら羊水に沈んでいた頃に、記憶にない素敵な出来事でもあったのだろうか。残念ながら覚えていない。それは当たり前だけど、覚えていないけれどただ、ママがトラックに轢かれたのは確かな事実だ。その衝撃でママは死んで、私が生まれたのだから、素敵な出来事というより衝撃的な出来事だったか。かくして礫死体から取り出された私だったが、パパはどうにもこうにも受け入れがたかったらしく、もう顔も覚えていない程度にはお会いしていない。覚えていないわけで、したがって罪悪感はないけれど、口先だけで謝っておこう。ごめんねパパ、私の方が生き延びちゃって。

そう考えると私の無類の水好きは、ママの影響なのかもしれない。私にとってママという存在は、水に沈んでいたあの頃に、無意識の中でだけ感じられたものだから、私は雨を感じながらママを感じていたのかもしれない。そうかもしれないし、そうではないのかもしれない。

れない。まあどうだっていい。それはどうでもいいことなのだ。ただ、私は水が好きで、今現在もとても愛おしいということが重要なことから。

だから今現在空からは線で連なうような細かい雨が降り注いでいて私は傘を差していなくて、花柄のワンピースが水分を含んで重く地中へ沈みこもつとしているかのようで、同じぐらいに空も重くて昼間だか夕暮だかよくわからない時間帯は暗くも明るくもなくそして、そして、そうだ足元には長い黒髪の女が滲んだ赤を広げながらうつ伏せで地面とキスしているのだ。嗚呼、そうだねママ、そんなことはどうでもいいね。そんな事実なんて、心底どうでもいいんだよね。

こちらに無防備にチラ見せされてる旋毛さんに、軽く一蹴りプレゼントする。黒い塊は重そうにゆらりと少しだけ揺れ、めんどくさそうにすぐ止まった。ちゃんと死んでるみたい。五分ぐらい眺めてみたけど、生きてるなら泥に顔突っ込んだ状態で、五分も静止できないはずだ。見下ろし作業は中断して、屈んで女の腕を握る。薬指には指輪があつて、それを視界に収めた瞬間、小さく舌打ちをした。

わたしあなたのおとうさんとおつきあいを。ほんの数十分前の記憶。耳障りな声。雨音の方がずっとずっと綺麗。おかあさんのことは書いてます。嗚呼ホント、重いなあ。滴る水分のためか、尊い命とやらのためか、やたらと重いその腕を両手でしっかりと掴み、滑りの良くなっている泥の上を勢いをつけ引き摺っていく。引き摺って、止まって、引き摺って、止まって。女の白かったブラウスを、茶色と赤で染め上げていく。

馬鹿な女。特別な感慨も湧かず、鼻で小さく息を吐いた。世の中が美しいものだけで構成されると、根拠もなく信じてるだけの馬鹿な女。礫死体から取り出された少女を前にして、何の疑問も抱かず

に憐憫の色を浮かべてわたしあなたのははおやになりた五月蠅い五月蠅い五月蠅い黙ってる馬鹿女。じゃり、じゅり、ざり、びちゃっ。落ち着く水音。私の世界の音。邪魔をしたお前が悪いんだ。いつも通りの散策だった。お前が突然現れて、慣れ慣れしく声をかけてこなければ、嗚呼違うどうでもいいどうでもいいや、そんなことはどうでもいいんだった、ねえ、ママ。

ここは超がつく田舎の真つただ中、のしかももつと奥まった、邪魔くさい木々で覆われている細い山道。地元の間でもあまり使われない、よく言えば辛気臭い悪く言えば死体が転がってそうなあぜ道だった。舗装されていない道から外れてちよつと木々の奥まで行つてしまえば、発見はだいぶ遅れるだろう。もともと死体が転がってそうな道なんだし、今更一体ぐらいほんとに死体を転がしたつて、さほど問題はない。あとはせいぜい、白骨化するまで誰の目にも触れないでくれればそれでいい。雨の多いこの土地で、せいぜい血肉を腐らせ分解されてしまえばいいんだ。それがお前の罪で罰だ。だつて、あの時だつて、この女は。

突然現れて、慣れ慣れしく声をかけてきた馬鹿女。綺麗な黒髪は長く真つ直ぐ、さらさらと肩口をくすぐっていた。当たり前だ。女は、傘を差していたのだ。くぐもつた空を上品な柄が丸く切り取つていて、気が付いたら飛びかかつていて、右手には石が握られていて、それを振り下ろすだけの絶対的優位なポジションも確保できていた。そこにはあつた。濡れていた。どこもかしこも濡れに濡れて、傘はどこかへと転がっていて、それを確認した瞬間に私は何か叫んだよ。うな気がしたけれど、今ではもうよくわからない。雨は何もかも包みこんでくれる。女の切り裂くような悲鳴さえも。固いものと柔らかいものと固いものがぶつかる音も。

さて、ある程度草木で偽装もできたし、そろそろ帰ろうか。手に付いた泥と赤黒い何かを裾に乱雑に擦りつけながら、草を踏みしめ元のおげ道へと戻っていく。ぴちゃん。嗚呼、雨音。不規則に、唄声のように私を誘う、導く音。水分が飽和した世界では耳の奥まで水が流れ落ちていく様で、振り返る代わりに私は鬱蒼とした空を見上げた。曇天の空。喉の奥で響く心音。雨はまだ、当分止みそうになり。

みくづになりゆけば

（ 雨は降っていて、私は沈んでいって、それでも降り止まなくて、
嗚呼 ）

（ お題 : 変わっているお題配布所 ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7426r/>

みくづになりゆけば

2011年10月8日19時19分発行